

経済のルネサンスか、ルネサンスの経済か*

森 田 鉄 郎

I

14世紀中ごろから16世紀前半に及ぶイタリア＝ルネサンスの社会経済史的背景については、一般に、イタリア中世都市の繁栄、つまり地中海上東西仲介貿易を軸として12、13世紀に頂点を持つといわれる北・中部イタリア都市商人のいわゆる商業高利貸資本の栄えが指摘されて来ている¹⁾。もっとも、ルネサンスは純粋に文化上のことであるので、これを社会経済的環境と結びつけて論じるべきではないとする意見がある。ルネサンスという名称はたしかに、いわゆるルネサンス当時のイタリアの文化人たちが、自分たちの担っている美術や文学の隆昌に対して抱いた復興ないし更新という自覚に発しており、がんらい文化概念ないし美術の様式概念に対応するものであった。しかしだからといって、ルネサンスを経済や政治の動向と結びつけて論じることを拒否してよいものであろうか。

なるほど、文化の動向と経済のありようとを余り直線的かつ具体的に結びつけるのは問題である。ロペスが指摘するように²⁾、恰もメーディチ銀行の複式簿記の運用が、ミケランジェロの芸術的創作意欲を刺激して彼にメーディチ家廟を創らせ、一方ではまた、メーディチ家廟の存在が銀行家たちをいっそう荘大な銀行企業に振いたたせたとするような結びつけ方は適切ではない。またわが会田雄次氏がミケランジェロのダヴィデ像の異状な手の大きさに象徴される彼の作品の均斉の欠如を、全面的ではないにしろその時代のフィレンツェ社会のはらんだ矛盾と関連させているような例も行きすぎた解釈とされるかも知れない³⁾。

しかし、ルネサンスの成立を論じ、あるいはその文化全体の本質ないし基本的性格を問題にしようとする場合、思想・文学・美術などの内面的価値にだけ眼を限ってその動向を論じるのでは不十分なのではないか。こんにちのルネサンスに関する定説的解釈を樹立したといわれるスイスの文化史家ブルクハルトは、もっぱら文化上の諸特質のみをとり上げ、経済面を無視したと一般にいわれているが⁴⁾、その彼にしても14世紀に始まるイタリア人の古代への傾倒の必要不可欠の前提として、当時イタリアでのみ始まった都市生活の発展、貴族と市民との事実上の平等化、さらに商売上の必要から教養の必要性を感じ、かつそのための間暇や資力の余裕を持った一般社会の形成などを指摘

している⁵⁾。

いっぽうイタリア中世史の権威モルゲンは、個人主義的宗教精神の成立を以てルネサンスの成立を語る。彼はジョヴァンニ＝ヴィッラーニとマキャヴェッリ、ジョットとラッファエッロとの間のそれぞれ著しい違いを指摘して14世紀中ごろを以て中世とルネサンスとの間に一線を画するが、その際彼の視点は、14世紀はじめの異端運動の敗北により神の王国の夢が破れて、集团的救済の期待にかわり個人的救済への期待が抬頭した事実置かれる。そして彼は、この個人主義的宗教精神がペトラルカにおいて人間精神の発見につながり、彼を以て中世の世俗的宗教性の理念が、人生と文化とについての理念にとってかわり、地上の美に感動したペトラルカ（ヴァントゥ山登頂）において中世からルネサンスへの転換が行なわれたとする⁶⁾。

しかし彼のいうこの個人主義的宗教精神を呼びおこしたものは何なのか。さらにはまた12、13世紀の異端運動の流行を呼んだものものは何なのか。このように更に問いつめて行けば、中世の農奴解放や中世都市の成長などを背景としての「我の自覚」や「自恃の精神」の成長に行きつくのではないか。すなわち歴史としてルネサンスの成立過程をとり上げる場合、われわれは経済や政治を含めて社会の大きな動きの中でその文化動向をとらえることを要請されるであろう。

II

第二次大戦がおわり、研究の国際的な連けいが可能になるや、ルネサンスに関する国際研究会議がフィレンツェで持たれるようになったが、その第三回会議（1952年）では、「ルネサンス・意義と限界」との主題を掲げ、経済史家や政治史家なども広く動員して総合的にルネサンスを解明しようとした。その会議の意図は、ブルクハルトのルネサンス解釈が前世紀後半において定説的立場を固める一方では、同時にそれへの修正論・反論の形でルネサンスの解釈をめぐる多くの異論が提出され始め、今世紀に入ってもとどまるところを知らない趨勢を前にして、欧米諸国のルネサンス学者たちが何らかの統一的理解を見出そうとしたところにあったが、その際、とかく個々の芸術家や作家について、またその作品の内面を恣意的・主観的に解釈しがちな純文化的アプローチの積み重ねでは統一的理解の樹立が望めそうもないことへの反省が、政治史や経済史の研究者も動員して、その代表の報告をも共同討議の対象にとり上げさせたのであろう⁷⁾。

ルネサンスの研究において経済史的研究の必要性の認識は、すでに早くファーガソンやパロンらに見られる。ファーガソンはルネサンス研究史を総括した好著『歴史的恩恵におけるルネサンス』⁸⁾の結論の部分で、ルネサンスの解釈にあたり、他の分野の説明の補いとして経済史的考察が最も必要とされる旨を強調しており、パロンはまた「ルネサンスに関する懸案の諸問題」⁹⁾と題する論文で、ファーガソンのその提言の正当性を何人も否定することができないとする一方、しからば経済史的研究と他の分野の研究との融合はじっさい如何にして達せられ得るのかと自問したのち、次の

ように説くのである。

すなわち、経済史家の間では一般に、イタリア商人階級の経済活動は1300年ごろが頂点であり、文化史的にルネサンスと呼ばれる15、16世紀の時期には、その取引量も人口数もそして商人の企業精神や公共心さえも先行する諸世紀より劣るものとなり、いわゆる「ルネサンスの個人主義」もかれらの精神から失われて来たとの共通認識がある。そこで、この食い違いを解決するためには、ルネサンスの個人主義に関するブルクハルト的概念にそって考えられて来た「経済上の個人主義」観を経済史の分野で検討し直す必要があるが、個人主義にもいろいろのタイプがあるから、1400年代初期のフィレンツェ貴族や知識階級の政治的文化的活動についての最近の積極的評価の上に立って、従来の「ルネサンスの商人像」とは別の商人類型を考えるべきであろうとするのである。

このパロンの提言は3つの重要な問題をはらんでいる。まずその1は、この論文の冒頭でも示したように中世からいわゆるルネサンス期にかけてのイタリアで、経済的繁栄の絶頂期と文化の最盛期との間にはぼ2世紀のずれがあることの指摘、その2は彼が個人主義を以てルネサンスの文句なしの指標としていること、第3はその個人主義を軸として「経済のルネサンス」の存在を肯定しようとしている点である。第1の点については、過去の繁栄によって蓄積された富を温床として文化が育ち開花するということは十分あり得ることと考えられ、何も経済の絶頂期と文化の最盛期とが一致しなくても一般論としてはさして問題にするにあたらないのではないか。また、1300年代がイタリア中世都市経済の絶頂期であるとする説も必ずしも確立した学説とはいえないようである¹⁰⁾。ともあれこれらについては後にふれることにするが、第2の点、つまり個人主義をルネサンスの指標とすることもどうかと思われる。ルネサンスの本質については諸説があり、単純に個人主義を以て割り切ってしまうわけにはいかないからである¹¹⁾。そして第3の点については、美術や文学においてルネサンスの特質とされるものと符合する何らかの特質を経済面ないし経済の担い手としての商人の意識面に探りあて、「経済のルネサンス」を論じることが果して可能かどうか、これに関し、上掲の第三回ルネサンスに関する国際会議における経済問題の報告者サポーリの重要な指摘が想起されるのである。

III

その会議で経済部門での基調報告を委ねられたイタリア商業史の権威サポーリはまず、「古代世界の終末ののち、いつから経済のルネサンスについて語り得るか」と自問する経済史家は、混乱の末にひとつの確認に到達する。すなわち事象そのものよりも、その担い手のメンタリティーにそくして経済以外の他の諸局面の考察をとり上げ、問題に直面して行く他の分野の専門家たちが確定した『時期』の年代的もしくは論理的図式から、経済史家は脱却しなくてはならないとする確認である」と説きおこしたのち、一般に他の分野でルネサンスを中世から識別する指標とされる「芸術の

ための芸術」・「政治のための政治」・「科学のための科学」といったパターンを経済にあてはめると「経済のための経済」について語り得るときにはじめて経済上のルネサンスを問題となし得るわけだが、そのためには一般にルネサンスとされる時期よりも時代をはるかに下らねばならないという。彼によると文芸上のルネサンス期のフィレンツェの一貴婦人アレッサンドラ＝マチンギ＝ストロツィは1476年に当時普及していた公債投機に対して罪の意識を抱き、また1532年にアントワープのスペイン商人たちがソルボンヌ大学の神学者たちにかれらの仕事が道徳的に正当か否かの伺いをたてている一方、近代資本主義に固有な「生産のための生産」そして「経済行為のための経済行為」にそくした発言が19世紀のヘンリー＝フォードの手記のうちにはじめて完全な表現を見出すとすれば、ルネサンス期はおろか宗教改革期もまだ経済行為に関する観念体系の転換にとって画期をなさないのである。

事実そのものにそくする経済的局面にとっては、時代区分を行なうよりは連続の原則に照らして見る方が、はるかにその発展の姿を正しくとらえ得ることを強調したうえ、彼は経済上では会議の主題の前提である「ルネサンス期」なるものの設定には応じられない旨をことわる。そしてむしろ「ローマ世界の終末ののちヨーロッパを支配した自給自足的・閉鎖的荘園経済に欠けていたもの、すなわち労働と政治闘争との能力を持った社会階級の新たな分岐を伴っての都市の再興、たんに市内住民の需要に応え得るだけでなく、膚接する田園から吸収する食糧への見かえり品を生み出し得る都市生産業の再興、遠隔地間の取引すなわち結局は輸出を狙いとする製造業を振興するに至る商業の再興、そこにこそまさに再生（リナスタ）の兆候が認められるのだ」とする。

このような前提に立って彼は10世紀以来バーリ・アマルフィ・ヴェネツィアなどの商人たちによって担われた東西間の商業交通の振興より説きおこし、12世紀末から14世紀はじめにかけてクライマックスに達するイタリア諸都市の大繁栄の様子に概観を与える。彼によると「経済上のルネサンスは大国際商業の確立を以て始まる。そしてこの確立に他の文化的ルネサンスの諸現象が伴っており、それらの文化的諸現象は、経済の健全な基盤の上こそ続いて発展の道を辿り、14世紀から16世紀にかけて経済現象がすでに早く13世紀に達成した表現の天才性と力強さとに到達する」のである。

要するに彼は、いわゆるルネサンス期の経済を、文化上のルネサンス現象と相通じる諸特質を以て画期づけることを拒んだのち、経済のルネサンス（この場合のルネサンスは「ローマ法のルネサンス」や「商業のルネサンス」などという場合同様、復興一般を指す普通名詞である）に続くイタリア中世都市の繁栄を概説的に述べることによって、彼に課された課題に応えようとするのである。その間彼は、13世紀から14世紀にまたがる1世紀半をイタリア経済の英雄時代と呼び、その経済の担い手であるイタリア諸都市の商人たちの精神的逞しさを賞揚する一方、15世紀以降のイタリア経済の量的拡大は認めるが質的には頹廃を指摘して、文化史的に本来的ルネサンスとされる時期

の経済について消極的評価をしか与えない¹²⁾。

このサポーリの報告に対して、直ちに文化史家たちから異議が唱えられた。モルゲンは「サポーリはルネサンスの経済よりも経済のルネサンスについて語ったに過ぎない」と不満を表明し、農業経済から都市経済への移行の瞬間における経済的ルネサンスを個性化してもルネサンスの問題をせん明することはできないと断じ、ロペスが「もうひとつのルネサンスか？」¹⁴⁾と題する論文で、ヨーロッパの10世紀に社会生活のあらゆる面で変化が目だつのを指摘し、ルネサンスを文字どおり再生ないし新受胎の意味で受けとるなら、10世紀こそ真のルネサンスの時期とされるべきではないのかとするのを引合いに出して、そのような指標でリナシェンツァ（再生）を語るならあらゆる型の生活の更新はリナシタ（再生）であり、人類の全歴史はリナシェンツァの継起であるとした。その指摘の裏には、いわゆるルネサンスは復興一般を指すものではなく、個性を持った独特の文化動向であるとする立場があり、そのような文化動向で彩られた15世紀から16世紀前半にかけてのいわゆるルネサンス期の経済は、10世紀から13、14世紀に及ぶイタリア中世都市の繁栄を都市経済や遠隔地商業の復興にそくして説いても何ごともせん明されないというわけである。フィレンツェ大学のルネサンス哲学の教授ガリンも「サポーリはわれわれがルネサンスと呼ぶ時期とは別の歴史時期の経済は明らかにしたが、ルネサンスの経済についてはアンティテーゼを示すだけにおわった」と批判した¹⁵⁾。

これらの批判に対してさらに後のことになるが、サポーリは「中世とルネサンス、新しい時代づけへの示唆」なる一文を草して、14世紀ごろのイタリア文化に見られた革新的な諸動向を例示しながら、本来この時期こそがルネサンスと呼ばれるべきで、ルネサンスの画期はブルクハルトらのものより2世紀くり上げられるべきだと、いわば居直りの立言を行なう¹⁶⁾。このサポーリの提言はしかし、フランスのアナール学派などの注目を呼んだようではあるが、必ずしも一般には受容されない¹⁷⁾。というのも初期ルネサンスの革新的・自然主義的・現実主義的な文化動向と盛期ルネサンスの理想主義的・主観的・保守的文化動向とのいずれがルネサンス本来の性格を示すものであるかは久しく文化史家の間で意見が分かれて来たところで、少なくともこんにちでは一般的に盛期ルネサンスこそ本来的ルネサンスであるとの見方が優勢であるからである¹⁸⁾。

IV

ルネサンス論争の解決のためには、経済の復興一般を述べても意味はないとのモルゲンやガリンの指摘は傾聴に値いする。ところで盛期ルネサンスの経済をこそ語れといふかれらの要請に恰も応えるかのような主張が、すでに1951年のニューヨークにおけるルネサンスに関するシンポジウムでロペスによりなされている¹⁹⁾。彼は「不況と文化への投資」と題するその席での報告で、「文化は経済よりも遅れて発達するものであり、ルネサンスの知的革命は中世の商業革命の遅まきの子であ

る」とするような主張に対して、2世紀も早い事態をルネサンスの父親と認めるわけにはいかない」と断言し、「たしかにルネサンスはその発展のために中世が建設した都市を、ギリシア人が仕上げた哲学を、そしてネアンデルタール人以来人類が工夫して来た殆どあらゆるものを利用した。しかしその生活の道は過去の経済によってではなく、それ自身の経済によって条件づけられるべきである」という。そして彼は、13、14世紀の経済や文化を中世経済の頂点に対応する中世文化の頂点とする一方、15世紀におけるヨーロッパの全般的沈滞および中世的繁栄よりも一段低いレベルでの安定がルネサンスの経済的背景をなしたと見るのである。彼によるとそのような経済の状態がルネサンスの示した悲観主義と楽観主義との二元性の説明をよく援けるのであり、サヴォナローラからマキャヴェッリに、レオナルド＝ダ＝ヴィンチからミケランジェロに、デューラーからセルヴァンテスに、トーマス＝モアからシェクスピアにいたる人びとはペシミストの代表に数えられ、かれらペシミストの心意こそ経済的沈滞の知的表白なのだとされる。

そして多くの人びとが現実から逃避し、芸術や文学や哲学さらに数学的夢想の世界にさえ身をまかせるに到ったことは、何よりもまして経済衰退に結びつけて考えられるべきであり、その一方沈滞のうちにも安定を見出し得た人びとは楽観主義者となるが、しかしかれらもまた決して未来には眼を向けず、過去に完成の理想像を求め、その意味において古典古代を理想とし、またかれらの現代を古典古代とならぶひとつの高潮期と考えたのであるとする。

さらに彼はルネサンス文化の諸動向を経済の衰えに関連させて説明し、「文化の価値は地価が低落したまさにその瞬間に上昇し、文化の収益は商業の利潤率の低下したその時に増大した。資産を拡大することにより勢力と威信とを築き上げることに疲れた政治家たちは、今やきそって芸術作品の収集に向かった。取引のうちにも最も収益多く、最も永続的な投資口を求めて来た実業人たちは、今や書籍に投資した。その変化はイタリアで実業人と政治家とが同一人であったが故に、よりはっきりと現われた……」という。中世の商人たちが仕事に追われ稼ぎに専心したのに対し、ルネサンスの商人たちが文化に関心を向けたのは、経済沈滞による商売の閑散さの故であったとさえ彼はいう。そしてそのルネサンス経済衰退説に向けられた異議に答えて、のちにルネサンス期ヨーロッパ経済の衰えを示す諸統計をグラフにして示すのである²⁰⁾。

15世紀にヨーロッパとくにイタリアの経済が衰えたか否かについては経済史家の意見が分かれるところであり²¹⁾、それについてはさらに後にふれることとして、ロペスの説はたしかにガリンやモルゲンらの上掲の要請に形のうえではよく応えるかのようである。しかし内容については大きな問題が残る。なによりもまず、中世経済のある程度の衰えというようなもので、彼が近代と目するルネサンス期の経済を画期づけることができるかということである。そしてロペスが一方では、「中世の商業革命は農奴制や封建制をうち破って、出生より富に基づく新しいエリートを創み出し、ルネサンスに現代とあまり違わない社会を与えるゆゆしい諸変化をもたらす誘因であった」²²⁾となし、

上述のように10世紀こそ真のルネサンスの世紀と目されるべきであろうといったような提言を行なうのを見れば、彼の主張は根本においてイタリア中世都市の10世紀以来の繁栄にルネサンス文化興隆の経済的背景を見る在来の諸説とあまり異ならないのではないか。

V

近世に向かってのイタリア経済の衰えは、これまでルネサンスの衰えの背景をなすものとされて来た。それをロベスが盛期ルネサンスの背景をなすものとしたことは、一見画期的のこのように見られるが、せんじつめれば彼の主張も、15、16世紀のイタリア経済を量的には増大であっても質的に退化であるとしたサポーリの説と本質的にあまり異ならないものようである。それに比すればルヌアールやケルレンベンツの主張の方が、在来の説の伝統に従いながらもはるかにルネサンスの経済をそれなりに個性化しているようである。

ルヌアールは上掲のサポーリの報告に続く討論において²³⁾、14、15世紀のイタリア実業人が、新しい理念すなわち知的・芸術的ルネサンスの発展のためにとくに思わしい雰囲気準備したとする。彼によると14世紀イタリア商人の商売の必要がかれらのうちに現実的・合理的精神を発達させ、また商売が教会法によって断罪されるべき行為がかれらに強いたにもかかわらず、教会から定められた倫理的規範内に身を持する必要がある、15世紀の人文主義者や哲学者のうちに認められる二重真理（ドッピア＝ヴェリタ）のかの傾向をこれら商人のうちに発展させたのである。そして商業の四大中心であるフィレンツェ・ジェノヴァ・ミラーノ・ヴェネツィアに中世の大学が存在しなかったことが、実業人をスコラ哲学や教会法の理念にあまり触れさせないでおき、かれらに現実的・合理的世俗文化を受け入れ易くしていたのであり、またポッカッチョ・ニコロ＝ニコリ・レオン＝バットィスタ＝アルベルティなど偉大な人文主義者の多くが商家の出である事実は、商人の世界と新しい理念との合致を証拠だてるのである。

「古代の著作家たちによって言及された古代の生活の快楽主義的諸局面は、儲けが生み出す喜びのためにもっぱら儲けを追い求めた人びとに、そしてまさに古代人と同じような活動的な都市に生活した人びとに気に入られ得た」のであり、彼によると14、15世紀の芸術品の大多数の注文者は実業人であり、かれらこそ都市社会の重要な部分をなし、同様に支配的エリートでもあった。そして彼が「14世紀の人文主義的ルネサンス」と呼ぶ文化動向にかかわりを持つこのような実業人は彼によると中世商人一般では決してなく、13世紀の末以降定住的になった商人たちであり、かれらはそれ以前の旅先での活躍を主とした初期の商人たちとは性格を異にするのである。要するに彼は中世盛期の都市社会のエリート層を構成した商人たちの精神とくにその合理的メンタリティなどからルネサンスを説明するのである²⁴⁾。

一方、ケルレンベンツはルネサンスに中世的要因と近代的要因の混在を認めるいわゆる複数主義

的立場をとり、ルネサンスを過渡期としながらも、なおそこに「人間と自然の発見」を基調とする精神運動の展開を認め、それが北・中部イタリアの諸都市わけてもフィレンツェの企業的商人上層の精神態度に根ざすことを強調する。そしてそのような商人タイプが13世紀末以来、小手工業者の心意から隔絶したものとして際だって来ること、かれらが銀行業や大商業そして問屋制的工業企業など多角的経済活動をもって都市の繁栄を代表したばかりでなく、政治的・社会的にも大都市の生活を支配したこと、フィレンツェのバルディ家・ペルッツィ家・アッチェイウォーリ家、プラートのフランチェスコ＝ダティーニ、ヴェネツィアのピエートロ＝ソランツォといった名によって代表されるこれら大商人が世俗的教養を積み、旧来の宗教的・倫理的感情にとらわれない合理的・現実主義的考え方を身につけ、その物質主義的傾向のもとに贅沢な生活環境を築き上げ、その奢侈と学芸愛護とをもって人文主義者や芸術家たちがそこで活躍する精神的・風俗的環境を準備したこと、ヴェネツィアやフィレンツェでの都市人口の5パーセントないし10パーセントを占めたこれらエリート的大商人層によって率られる市民層が、かれらの強い文化的関心において古代都市国家の市民文化に模範を求めたこと、ことに商人上層の者が古代ローマ人の言葉や文化への強い志向を示し、簿記を記し勘定を記すペンで自ら年代記を草し、詩を作り、小説を書いたことなどを指摘する²⁵⁾。

しかしここでルヌアールやケルレンペンツにより論ぜられている関連は主として初期ルネサンスの現実主義や合理主義ないし自然主義的文化動向と14、15世紀の富裕商人のメンタリティとの間のものであり、その点ではサポーリどころか、ルネサンス当時の人文学者レオナルド＝ブルーニやフラヴィオ＝ビオンドなどにはじまり、ヴォルテールなどを経てこんにちに及ぶ通説、すなわちルネサンスの経済的背景をイタリア中世都市の繁栄に見る一般の見解と本質的には少しも異ならない²⁶⁾。たとえば今世紀20年代にダヴィッドゾーンが、イタリア中世都市の繁栄こそルネサンスの経済的背景をなすものとしながら、ルネサンスの現実的基盤としてフィレンツェの13世紀から15世紀に及ぶ繁栄の消長に概観を与え、当時の商人たちの活動は彼らの心中の高次元のファンタジーと内的関連をもち、しかも商人たちはそのファンタジーの命ずるところを達成すべき冷静な理性を備えていたが、その冷静さはまた芸術家たちも共有するところであり、かくて同じ都市壁内に詩や造形美術の傑作と世界商業の創造的理念とがともに生いたったのも偶然ではないとする²⁷⁾のとかれらの説はどこが異なるのであろう。

しかしこうした説では、上述のモルゲンやガリンの要請、すなわち盛期ルネサンスの経済を語れとの要請には適切に答えられていない。その点、もう少し幅広い説明を与えているのは、こんにちなお最も権威あるイタリア中世経済史の研究成果を残しているドーレンである。

VI

ドーレンはいう。後期中世におけるイタリア諸都市の物質的繁栄の基盤は、中世イタリアが地中海上東西貿易の主体的担い手となったことにあるのだが、「この遠隔地商業に原料の購入と製品の販売とを依存する資本主義的工業」が展開するに及んで「大胆な投機的頭脳と、広い視野において合理的に熟慮しながら機会を打算する商人根性」とをあわせ持った資本家的企業家気質が生まれ、それはしばしば宗教的・倫理的拘束を受けはしたものの、それなりに商人的企業家の経済意識となり、さらに経済生活の分野をこえて、かのルネサンスの早い明瞭な人間タイプのひとつをなしたと。彼によると、ルネサンスは中世のしがらみから徐々に脱却して来た新しい社会の世界であって、その形成にとって古典古代の再発見は推進力であるよりはむしろひとつの兆候であり、決定的な動機であるよりはむしろ、一部住民層の民族精神的な親近性の故の鼓舞的な回想であったのである。そしてルネサンスにおいて、なお超越的なもの、信仰や宗教的価値づけ、地上的なものへの神性の投影といったことがまったく滅んだわけではないが、それらのものはたんに付随的なものとなりおおせ、ルネサンスはそのすべての美と危険な誘惑的な地上的魅力と悪魔的な企て、さらに存在の深奥にまで徹した富と享楽への渴望、あらゆる形態の地上生活の余すところない汲みつくしへの渴望などを以てする此岸生活への帰依の世界であった。彼はさらに、こうしたルネサンスの形成にあたって、地中海上東西貿易のもとでイタリア商人がイスラム世界の人びとと日常の平和的接触や持続的な通商関係を持ったことの意義を強調し、オリエントに蓄積された宝物への通曉とそのヨーロッパへの移植とを通じ、かれらが物質生活の新形成に対してと同様に新しい人間タイプや新しい生活態度の生誕にあずかって力のあったことを指摘する。彼によると、そのことはこれまでルネサンスの成因として必ずしも十分に認められていなかったが、12、13世紀においてイタリアがフランスに追いつき追いこし、ヨーロッパにおける精神的・芸術的優越を獲得するにあたって最も重要な要因であったのである。そして「ヘレニズム以来オリエントに堆積されていた各種の宝」をヨーロッパに仲介したイタリア商人たちこそ、「近代社会の最も重要な社会形成要因のひとつであり、埋もれており再び掘り出された文化価値の重要な仲介者であって」、その自立的な、また合理的・打算的精神によってブルクハルト以来われわれが近代人すなわちルネサンス人の主要特質と目することに慣れて来た人間タイプを帯びるものであった²⁸⁾。

このドーレンの主張で何よりも注目されるのは、そこで資本主義的工業への言及がなされていることである。なるほど、中世イタリア都市の繁栄を資本主義的なものとする通説は早くから存し、資本主義という言葉そのものの使用は珍しいことではない。たとえばダヴィットゾーンによると「すべての北・中部イタリアの大都市の経済生活の様式は13世紀の間に完全に変容させられた……中略……資本主義の発展がその時代に特徴を与えている」²⁹⁾のである。しかしそこで資本主義とし

て把握されているものは、わが大塚教授が前期的資本と呼んだいわゆる商業高利貸資本で、中世の遠隔地商業一般の繁栄を資本主義としているのである。

いまドーレンの発言にそくして資本主義を問題にするのは、彼が資本主義的工業の繁栄に焦点をあてて資本主義をとらえ、つまり産業資本を対象にとり上げようとしているからである。彼によると、14世紀30年代ごろからフィレンツェなどに栄える前貸問屋制（Verlagssystem もしくは putting-out-system）的毛織物工業や、15、16世紀の絹織物工業は Hoch-kapitalismus の近代工業と質的には余り隔たりのない資本主義的産業なのである³⁰⁾。上掲の彼の言葉で「遠隔地商業に原料の購入と製品の販売とを依存する資本主義的工業」としているのがそれである。その説によると、中世の商業高利貸資本の繁栄から一步進めた産業資本主義的繁栄を以てルネサンスの経済を語ることになる。

VII

サポーリの上掲の報告に対するピーサ大学教授ヴィオランテのコメントは正にそれである³¹⁾。ローニャ大学教授のサイッタがサポーリの報告に対して、ゾンバルトにより1400年代に発するとされた資本主義の起源への言及がなされなかったことは遺憾である。ゾンバルトの理論（近代資本主義論）は多くの注意を以て考察されるべきであろうと発言した³²⁾後を受けて、ヴィオランテは「1300年代前半と1500年代はじめとの間に見られる環境と人における顕著な差異にも拘わらず、サポーリ教授はむしろ質的進化より量的進化を呈示したが、私には彼が既に中世の経済とルネサンスの経済との間に量的なものでなく質的な実質的差異の存することを決すべき十分な要素を供給したように思える」としながら、サポーリが言及はしながらもルネサンス期を画すべき質的差異としてとらえなかった事象、たとえば商人の心意の変化などをとり上げ、14世紀中ごろに向かつての旧来の大商人の没落と新商人の抬頭とをルネサンスの始期に固有な新しい事実と認め、「大黒死病に先立ちイタリアばかりでなく、ヨーロッパを見舞った経済的危機が再興の力をも早持たなかった中流の企業を倒産させた。したがって1400ないし1500年代の商人たちがいっそう強く広い実業活動を展開したとしても、それは中流の手工業者層の犠牲において行なわれた集中過程を通じて実現されたのであり、アルテ（ギルド）の組織外に残された賃金労働者や家内労働者層が同時に数を増しただけに社会構造の著しい変化がそこに存在したのである」とした。

続いてヴィオランテは僭主政の成立についてふれ、僭主政による封建的再編成（彼のいう新しい封建制）のもとで大商人層が土地貴族化し、同時に僭主の宮廷貴族化して、実業人としての突進性を喪失して行った事態にもふれ、かれらの消極化した意識をいわゆる盛期ルネサンスと結びつけている。そして「不安定や不確実についての煩悶、ルネサンスの人びとがそれに対して非常に多様に反応した人力の限界についての悩み、それらが始まりつつある時代についての精神的問題の前提で

あるなら、なお決定的ではないにしてもイタリアにおける新しい社会経済的構造、すなわち資本主義の到来が新しい封建制度、新しい大土地所有、それから発生した新しい市民諸階級、都市や農村の新しい平民、今日なおわれわれが一部分体験しつつある新しい諸問題を伴って近世イタリア社会と中世社会との間の通路をなすと語を結ぶ。

そこで彼が中世と近世との画期の指標としている資本主義が、ドーレン同様、問屋制による産業の組織を目していることは明らかである³³⁾。フィレンツェのものを代表例として、14世紀ないし15、16世紀の北・中部イタリアの大都市で展開した問屋制的織布工業に近代資本主義の性格を見るのはかれらだけではない。上掲サッタの指摘にも見られるように、ゾンバルトはイタリア中世都市の大商業にはなお手工業的性格を見ながらも³⁴⁾、その一方ではフィレンツェの毛織物工業や絹織物工業に近代資本主義の性格を認めている³⁵⁾。彼よりもさらに以前にマルクスがすでに同様の見解を表明しており³⁶⁾、そのマルクスの影響下に強く立つ現ソビエートの歴史家たちが、15、16世紀のイタリア経済について近代資本主義の到来を認めても不思議ではない。

ソビエートの歴史家スカスキンは「イタリアとフランドルの、既に14世紀に発展した商業を持った都市で、資本主義的諸関係が次第に確立し始め、富裕な商業ブルジョワジーが産業を占領し始める。16世紀においてそれは既に全ヨーロッパ的現象である。16世紀は西欧において資本主義的紀元の発端 *début de l'ère capitaliste* である。この時代のそこで進歩主義者であったブルジョワ階級の活動がルネサンス文化を創造した³⁷⁾」とする。そして最近トスカーナ地方の中世農制とくに地代形態の実証的研究にすぐれた業績を示したコテルニコワも、農業面において資本主義的生産のデビューを認めている³⁸⁾。

ところでこのように近代資本主義を以てルネサンスの経済を語る場合、ヴィオランテの上掲の発言のうちすでに窺えた矛盾、すなわち、初期資本主義が近代に向かってはらんでいた発展性と盛期ルネサンス文化に見られる斜陽的性格の間の矛盾はどのように説明されるのであろうか。その点で、故フィレンツェ大学教授カンティモーリが第十回国際歴史学会議に際して提起したルネサンスに関する新提案の問題性が併せとり上げられるべきであろう。

VIII

カンティモーリは、ルネサンスという概念は中世という概念と同様に、科学的検討のすえ樹立されたものでなく、いわゆるルネサンス期の文人たちの直観的考え方、すなわち古代文化の滅びたのちの文化の死滅した中間時代と、文化を復興している自分たちの当代という捉え方をもとにして出来たものであるから、それをもとにして時代区分ないし時代づけを行なおうとする時にすっきりしないものが生じるのだとしながら、多分に A. トンビーの *italistic age* の論や D. ヘイないしファーガソンなどのルネサンスを新時代として個性化しようとする主張をうけ入れて、むしろルネサ

ンスという捉え方をすて、人文主義時代 *l'età umanistica* として、14世紀からフランス革命にいたるまでの全時期を、すなわち、文学的にはペトラルカからゲーテにいたり、教会史的には大ススマ（教会分裂）から学校教育の世俗化にいたり、社会経済史的にはコムーネ期もしくは商業的初期資本主義から産業革命にいたる時期を、また政治史的にはカール四世帝の死からフランス大革命にいたる時期を単一の一時期 *un periodo unico* としてとらえるべきだとする³⁹⁾。続いて彼は1957年に出たサポーリ教授への記念論集の中で、上述のようにサポーリが経済史的には文化史家たちのいうルネサンスなる画期が立てにくいとしたことに賛成し、その諸困難に鑑み、封建制度のおわりと資本主義の確立とによって画される一時代、年代的には1300年代から1700年代に亘る時代を、その間に継起する初期資本主義、封建制度の残存、1600年代における封建制復活 *rinascità feudale* などの小区分をあえて無視して、人文主義時代 *l'età dell'umanesimo* として単一化してとらえるべきだとしている⁴⁰⁾。

このカンティモーリの説は、ルネサンス期なる画期を否定した点で注目されるが、ルネサンスの経済を初期資本主義を以て性格づければ、イタリアの15、16世紀も西欧の17、18世紀も同一次元上にとらえられる結果となるのは当然である。しかしその場合、ルネサンスないし人文主義と啓蒙思想とを同次元上のものとしてとらえることになるのではないか。古典古代への憧憬ないし関心を支えとする人文主義と過去に価値を認めず進歩への無限の信頼に貫かれている啓蒙思想との顕著な性格の違いを、われわれはどのようにして一体化することができるのであろうか⁴¹⁾。そればかりではない。すでにカンティモーリが「敢えて無視して」と苦しまぎれの発言をしているように、16世紀イタリアで見られた封建的反動（再編成⁴²⁾）を17、18世紀西欧社会の近代化過程とどのように同列視することが許されるのであろうか。あるいはまた、ルネサンスに続くマニエリズモやバロックなどどのように位置づけられるのであろう。マニエリズモはともかくバロックはルネサンス社会とはかなり次元の異なる社会意識を反映しているように想えるがいかかであらう。ともあれ、盛期から末期にかけてのイタリア＝ルネサンスの円熟はしていても退嬰的な文化性格は初期資本主義のはらむ進歩的な社会性格とそぐわないように想える⁴³⁾。

この点の矛盾に解決の示唆を与えるのはマルティンの主張である。彼は革進的性格の著しい初期ルネサンスを冒険的海賊精神と打算的な商人精神との結合よりなる企業精神あふれる上昇期中世商人の意識を反映した *Risiko-kultur*（冒険文化）とし、理想主義的な盛期ルネサンス文化は、商売に成功し富裕な資産家に成り上った商人（ポーポロ＝グラッソ＝脂ぎった町人）、つまり恵まれた資産家 *beati possidentes* として金利生活（地代と利子そして公債投機）だけを思うようになった富裕大商人の意識を反映するものとしてとらえ、これを *Kultur der Arrivierten*（成功者もしくは成り上り者の文化）と呼んだ。そしてポーポロ＝グラッソの多くがベアティ＝ポッシデンテスとして僭主や小専制君主の宮廷貴族化するにつれ、末期に向かってルネサンス文化が、その担い手であ

るかれらの意識を反映して宮廷文化化したとする⁴⁶⁾。彼が中世イタリア都市の商人たちを安易に資本主義の担い手であるブルジョワジーとしている点を切り捨てれば、彼の説はかなり説得的である。

IX

そもそもマルティンが初期ルネサンス文化をリージョコルトゥールと把握したにつけては、当時の商人たちの担った遠隔地商業の性格への配慮があった。つまりそれは、海難や海賊・山賊（盗賊騎士団の横行）などの危険などリスク多いものであり、相隔った東西の市場間に恒常的な市場関係もなく、商人たちは言葉も習慣も異なる異教徒の世界に出かけ、正式な国交関係の保証もないところで冒険的に取引を行なわねばならず、その商人たちには上掲のサポーリも指摘したように英雄的な果敢な気質が要求され、その致富にはまた一か八かの投機性が強かった。つまり危険も困難も大きいが一獲千金の可能性にも富む商売を追求している商人たちの意識を反映した文化としてマルティンはこれを **Risiko-kultur** と呼んだのである。まさにこの中世商業の投機的性格の故に、ゾンバルドのいう脂肪化の法則ないし封建化の法則 **Die Gesetz der Verfettung od. Feudalisierung**⁴⁷⁾ が中世商人の上に見られるのである。つまり一獲千金で致富した商人たちは手にした富の貯えの場として好んで土地所有を求めたが、その土地所有にはなお封建遺制的特権が残っており、かれらの地主化はある程度かれらを半封建的土地所有者階層にくみ入れるものであった。ゾンバルトが封建化となした所以であり、それは中世商人に宿命的な変貌であった。サポーリもヴィオランテも「土地への復帰」として商人のこの地主化現象を指摘している⁴⁷⁾。

地主化しベアテイ = ポッシンテスとなった商人たちの意識が消極化するのとは当然であろう。サポーリやヴィオランテらは僭主政の成立が商人たちの意識を消極化させたとするが、それは事態を逆転させてとらえているのではないか。すなわち、恵まれた資産家としてシオペラーティ（無為徒食者）となったかれらの消極化した意識が、資産の安泰を願ってコムーネ内外の平和を望み、自分たちの政治的自由を犠牲にして僭主の独裁を受容したのではないか。そして僭主たちがやがて皇帝や教皇から侯伯の称号を得て、その支配権を世襲化し、小専制君主として都市国家に君臨するようになったとき、都市国家上層の市民層を構成したポーポロ = グラッソは進んでその支配を受容しただけでなく、機会を求めてその宮廷に出入りし、迎合し、自からの意識を廷臣化ないし貴族化したのである⁴⁸⁾。

僭主や専制君主に反発する者が生命や財産を奪われる危険にさらされる一方、これに迎合した者は没収財産の分配にあずかり、また官職（今や都市国家の公職ではない）や宮廷貴族の榮譽を手にする機会にも恵まれるとき（サポーリ）、すでに商売を離れ地代や金利にもっぱら寄生し始めていた富裕市民が進んで専制政治に妥協し、貴族化の道を進んだのも不思議ではなかった。ルネサンス

的国家としてルネサンス期にはかつての自治的ないし自主的都市国家の存在にかわって、小専制君主国の存在が普及するが、末期ルネサンスにはそれら小君主の宮廷に出入りするようになった市民上層の意識を反映して文化も貴族化への傾斜を強く示したのはマルティンの指摘どおりである。ミラーノ公ロドヴィーコ＝イル＝モーロの宮廷に自らを売りこんだレオナルド＝ダ＝ヴィンチの有名な例をはじめ、カスティリオーネの『廷臣論』、あるいはポリアルドやアリオストのエステ家宮廷での活躍などその間の事情を示す具体例は多い。なお末期ルネサンス文化のこの宮廷文化的性格の故に、それは西欧諸国の宮廷にもすすんで受容され、たとえば絶対王政下のイギリスやフランスの王朝文化の成立に影響を与え得たのであろう。

X

ルネサンス文化の大きな特徴のひとつはそれがさかんなメチェナティーズモのもとで開花した点である。上述した専制君主の宮廷の保護だけではない。ひろく王侯貴族や富豪のパトロネージのもとにこそルネサンスは華々しい展開を示しているのである。そしてこのメチェナティーズモ流行の背景として豪華な消費的な文化環境の成立が注目される。著名な経済学者であると同時に、キリスト教民主党左派を代表する政治家でもあるファンファーニはその消費的文化環境の成立を次のように説明している。15、16世紀のヨーロッパにおける人文主義やルネサンス、あるいはプロテスタント的精神革命の結果、経済的個人主義が出て来るが、「イデーの革命が人文主義的ないしルネサンス的段階を克服していないところ（例えばイタリア）では、それがもっぱら消費的生活に顕現する。生産分野では蓄積された大きな富の存在を利しての享樂的な生活への過度の偏愛が、生産者や商人の休まない活動を、それが卑しく不名誉であるが故に思いとどまらせる」。そしてその結果として支配階級の間では放埒な有閑生活が支配的となり、貴族をみならう諸階級のうちにも何ら強い生産活動の意欲が見られなくなり、全社会に有害な充足感がみなぎる。ルネサンスないし人文主義に固有な個人主義的心意の影響により、富の個人的消費が志向された結果、都市内外における豪華な邸宅の建造、骨董品や芸術作品による生活環境の飾りつけなど、個人的な生活の奢侈が追求され、15、16世紀のイタリア文芸美術の興隆すなわち、いわゆる盛期ルネサンスの芸術的成果が生まれるのである⁴⁹⁾。

この点ヴィオランテもまた、前掲の発言の中で人文主義的文化動向の影響が、富を集中した人びとを土地や邸宅など不動産の取得、美術作品の注文などに向かわせる一因であったと指摘している。もちろんその時代流行の文化上の動向が人びとの生活態度に影響を与える一面のあることは否めない。しかし本質的には人びとの生活に根ざした心意が文化上の動向に影響を持つと見るべきではなかろうか。つまりマルティンのいうようにベアティ＝ポッシンデステスとして過去に稼ぎためたものに寄生するようになった人びとの生活意識や文化意識が15、16世紀、すなわち盛期ルネサンス

や末期ルネサンスのイタリア社会の贅沢な消費的文化環境を生み出したとすべきであろう⁵⁰⁾。

そしてそのような商人の脂肪化が、上述のように中世商業に固有の現象であり、世俗内禁欲のもとで天職としての家業に精を出し、拡大再生産の道をひたすら辿り行く生産者的中産層（近代産業資本家のプロトタイプ）ないし産業市民の生きざまとまさに対照的な動向である以上、イタリア中世都市の生み出した繁栄を近代資本主義的なものと、たとえ初期という限定をつけても同一視できないのではないか。このことは、中世都市の繁栄においてヨーロッパの経済をリードしたイタリアが、近代において何故西ヨーロッパに比し資本主義の発展に立ちおくれ、17世紀以降社会の近代化の点でイギリスやフランスにおくれをとったかの問題を解く鍵を与える。

これについては、他の機会にすでに詳しく論じたので⁵¹⁾、紙数もつきたここでは立入らないことにするが、ただ結論だけをいうとそれは中世盛期からルネサンス期にかけてのイタリアの繁栄が、通説の説くように資本主義的なもの、もしくは近代資本主義への成長の芽をはらむものでは決してなく、あくまでも都市国家やギルドなど共同体的拘束に埋没した中世都市的な繁栄であり、その中世的要因の過度の優勢さの故に、かえってイギリスでのような近代資本主義の自成的成長を阻止する方向に作用した結果とすべきであろう⁵²⁾。

要するにルネサンスは、イタリア中世都市の繁栄が蓄積した富と、その繁栄を支えた中世商業ゆえの脂肪化の法則のもとに生まれたベアティ=ポッシンテスや封建的再編成の波にのった王侯貴族らの織り出す消費的文化環境の成果であり、その社会環境が示した斜陽化的傾向の故に、文化の性格も円熟はしていても退嬰的・高踏的な、理想主義的ではあっても決して前進的ではない消極的なものとなったとすべきであろう⁵³⁾。それ故にこそマニエリーズモの抬頭を迎え、やがて反動宗教改革の優勢とともにバロックの波にのみこまれて行ったのではないか。

XI

文化を商人たちの心意に関連させて説くことへの疑問が残るかも知れない。たしかに一般的にはすでにマルティンも指摘するように学者・芸術家と商人ないし実業人との意識のずれが見おとせない。しかし中世からルネサンスにかけてのイタリア社会では、経済的にばかりでなく知的にも社会のエリートであったものは富裕な商人階層の者であった。この点で当時、国際的大商業を貴族が行なっても不名誉でないとする社会通念があり⁵⁴⁾、またその国際商業が国家の偉大さのもとであるとの時人の自覚の存したこと⁵⁵⁾が注目される。たとえば元来は封建貴族出の家系に属し、聖職者になっていたベルナルド=カスティリオンキが1370年代早々に彼の父ラーボに宛てた書簡で、「なるほど貴方の兄弟たちや一族の者が商人であったことは存じております。しかし、市のすべての最も重要な身分よい人びとがなしたように反物や羊毛を取引しつつ、フランスやイギリスに赴き、卑しくなく貴く名誉ある商品を扱う商人でありました。そしてこのような営みは立派で偉大であると評判

され、それを営む者は祖国において認められ尊敬されております。かくて我が家門の何人も仕事の卑しさの故に軽蔑されないのであります⁵⁶⁾。」といている例、またフィレンツェの共和国の公文書にさえ「我が国民の精華であり、我が精力の基礎でもあって、それなしには我が共和国も無に等しい我が商人に⁵⁷⁾」といわれている事実などに注目すべきであろう。そしてこれらのエリート的商人、恰もわが中世の堺の豪商ないしそれ以上の存在であった実業人たちが、ニコロ＝ニコリヤ ヨーシモ＝デ＝メーディチの周知の例で知られるように自らも古典の教養を積み、古典の蒐集や古典の学問の振興に大きく力をつくしながら、流行のメチェナティーズモのもとで学芸を愛護してルネサンス文化を支えていたのである。たとえば末期ルネサンスのフィレンツェにおける文化サークルの活動の中で、マキャヴェッリも参加していたオルティ＝オリチェッラーリの集いは、商人出の都市貴族ルッチェッライ家の庭園で開かれたもので、その主宰者ベルナルドは自らピーサやローマの都市の歴史を著作しており、集う者の多くも実業人を兼ねた文人たちであった。

従来、人文学者と商人との間の社会階層の差が云われて来ていたのに対し、マーティンズがフィレンツェの場合にそくして人文学者の圧倒的多くが比較的富裕な商家の出であることを実証した研究⁵⁸⁾も注目される。前に紹介したルヌアールの文化人と実業人の一致の指摘は正しいのである。

だがしかし、商人たちの商人としての意識と文化動向とを関連させることはもとより適切ではない。また文化価値独自の発展や顔化の法則も十分認めるべきであり、ただ文化がその中で展開する時代社会の大わくを規定するにとどめるべきで、いえることは、たとえば経済的にも知的にもエリートであった都市上層市民のメンタリティと文化動向とを大きく関連させて、盛期ルネサンスにおけるプラトニズムや新プラトニズムの流行は、ベアティ＝ポッシデンテスとしてのかれらエリートたちの心意がそれらの思想の持つ高尚な思索性に魅力を感じたことが大前提であり、通説のいうようにたまたま東西教会合同会議に際しイタリアにやって来たギリシア学者の刺激がそもそものもとではないという程度のことである。

ともあれ経済上の動向と文化上の動向とを具体的に一々照合させて、そこに経済上のルネサンスと呼ばれるような画期の存在を認めることは不可能なことである一方、サポーリのように商業のルネサンスによって「経済のルネサンス」を画期づけてみても、モルゲンらの指摘のようにルネサンス問題を解く鍵にはならない。要は、ルネサンス期の経済の基本的性格を明らかにすることにより、その時代社会の性格を解明し、ルネサンス文化の本質や時代性を幅広く検討する道を拓くことが肝要とされよう。そのことはまた、たんにルネサンスの時代性の解明にとどまらず、中世と近代との属性をも明らかにし⁵⁹⁾、時代区分による歴史把握の深化につながるものである。つまり求められるものは「経済のルネサンス」の解明ではなく、「ルネサンスの経済」のそれなのである。

* 1962年に「経済のルネサンスとルネサンスの経済」という表題の論文を発表したイタリアの新進の学者 R. Romano は、この表題は一見語呂合わせの遊びのようだが、実はそれは重大な問題をはらんでいるのだ

といっている。“Rinascimento dell' economia ed economia del Rinascimento” in ‘Tra due crisi: L'Italia del Rinascimento’ [Torino, 1971] p. 35. Prima in ‘Kwartalnik Historyczny’ LXIX [Warszawa, 1962]) 彼はこの論文で私もその主張を紹介するロベスやサポーリの名を引合いに出しながら、こんにち「経済のルネサンス」と呼ばれる事態を以て「ルネサンスの経済」を語る風潮があるが、それは承認し難いことに思えるとし、その理由として、それは彼が15、16世紀のルネサンスを新時代への画期と考えるからだという。(l. c. p. 39.) しかしこの新時代を画すべき「ルネサンスの経済」に資本主義ないし近代社会の芽ぶきを認めることは拒み (l. c. pp. 40 sg.), 14世紀の危機に際しての中世都市経済の繁栄からの農業経済時代への転換を説く。(l. c. p. 49.) なお彼は上掲の彼の論文集に集録された他の諸論文において、この農業経済の時代にイタリアで見られた領主反動やギルド規制の強化などにふれ (たとえば l. c. pp. 80 sg.), イタリアではイギリスで見られたような近代資本主義の成長が欠如することを指摘する (たとえば l. c. pp. 28 sg.) 予てからの私の主張とよく似た彼のこうした新主張については、別の機会に立入って論じたい。

注

《Iの注》

- 1) たとえば今世紀初頭イタリア中世史研究の碩学ヴォルペは K. ノイマンのいわばルネサンス「ゲルマン起源説」を批判して、古典文化の復興がルネサンスに占める意義を再確認しながらも、中世が自らを更新して手をさしのべなかったら古典文化も動き出すことが出来なかったであろうといい、イタリア中世都市の繁栄とその担い手たるボルゲジアー (市民層) の意識とをルネサンスの母体と見ている。G. Volpe: *La rinascenza in Italia e le sue origini (prima nella “Critica”, 1904) in “Momenti di Storia Italiana”* (Firenze, 1952). なお拙著『ルネサンス期イタリア社会』吉川弘文館1967年刊 (1982年第三版) 48ページ以下とくに第2部の冒頭の部分参照。
- 2) R. S. Lopez: *Hard times and investment in Culture*, in “The Renaissance: A Symposium” (New York, 1953) および in “The Renaissance: Six Essays” Harper Torchbooks (1953), pp. 29 sg.
- 3) 会田雄次『ルネサンスの美術と社会』1957年 創元社刊, 118ページ以下。
- 4) ブルクハルト批判はファーガソンのものをはじめ数多いが、最近のものとして P. Burke: *Culture and Society in Renaissance Italy, 1420-1540*. (London, 1972) pp. 7 sgg.
- 5) J. Burckhardt: *Die Kultur der Renaissance in Italien* (Kröners Taschenausgabe), S. 165. 邦訳柴田治三郎訳『ブルクハルト』中央公論社 (昭41年) 235ページ他に岩波文庫 (村松恒一郎氏訳) にもある。
- 6) R. Morghen: *Medioevo cristiano* (Bari, 1951). pp. 348 sgg. “Rinascita romanica e Rinascimento” モルゲンはそこでヴォルペやノイマンさらにシャポーやベルトーニ、ブルダッハらのルネサンス説に概観を与えたのち、「人間の歴史に動因を与えるものは精神力であるから精神的現象に眼を向ける必要がある」(l. c. p. 357) としてこの主張を展開するのである。

《IIの注》

- 7) この会議の議事録 *Atti del III Convegno Internazionale sul Rinascimento* は1953年フィレンツェで刊行され、その序文で、ルネサンスの本質や時代づけをめぐる著しい混乱を来している現状を前に、可能な限りの厳密さでルネサンス概念の限界を規定しようとの企図のもとに同会議が、*Il Rinascimento: Significato e Limiti* の表題で開催されること、またそのような規定は「人間活動の全分野を対比することなしには不可能であろう」との認識を踏まえていることが明示されている。(l. c. p. 5.) G. マルティナーニ (ミラーノ大学) 教授はこの会議が第2次大戦後のルネサンス研究において一つの画期をなすとす。G. Martini: *Basso Medioevo in “La storiografia italiana negli ultimi vent' anni”* Vol. I (Milano, 1970) p. 119. この会議の輪郭については拙稿「I」(末尾の略記表参照) 32ページ以下参照。
- 8) W. K. Ferguson: *The Renaissance in historical thought*, (1948, Cambridge Mass.) なお同様な彼の主張は Ferguson: *The interpretation of the Renaissance: Suggestions for a synthesis*, in “The

- Renaissance, Medieval or Modern ?” (Bosten, 1959) pp. 101~109. にも見られる。
- 9) H. Baron: Moot problems of Renaissance Interpretation; An answer to W.K. Ferguson, in “The Renaissance, Medieval or Modern ?” pp. 110~112. なおバロンは「こんにちにおける歴史研究の魔法の杖は社会学的解釈である」とし、フィレンツェの初期ルネサンスに関し、経済的要因や政治的要因の分析をふまへ社会史的考察を行なう。Baron: A sociological interpretation of the early Renaissance in Florence, in “The South Atlantic Quarterly” Vol. 38, No. 4 (New York, 1939) pp. 427~448. 歴史研究にあたり、文化と政治の一体化的検討を欠くことが出来ないとした彼の代表作は The Crisis of the Early Italian Renaissance (Princeton, 1955), その序文12ページで彼は上掲の主張を展開している。バロンのルネサンス解釈とくにその市民的人文主義の主張に関しては拙稿「I」45ページ以下参照。
- 10) むしろそれを否定する最近の諸学説については拙稿「II」153ページ以下。
- 11) ルネサンスをめぐる諸説・諸解釈については上掲拙著『ルネサンス期イタリア社会』第一部および拙稿「III」参照。こんにちではむしろ、プーランド・ホイツィンガ・ゲッツらによって主張される説の方が有力である。かれらはその主張にそれぞれニュアンスの差はあるが、現実主義や個人主義を以てルネサンスの本質と見ることに反対して、15世紀の現実主義や自然主義を克服した16世紀のイタリアの理想主義に本来のルネサンスの姿を見る。(前掲『拙著』I部参照)
- 《IIIの注》
- 12) A. Saponi: Rapporto sull' Economia in Atti del III Convegno ecc. pp. 108~132. なおその報告内容の詳しい紹介は拙稿「III」92~101ページ参照。
- 13) R. Morghen: Discussione in “Atti del III ecc.” p. 133.
- 14) R. S. Lopez: Still another Renaissance? in “American Historical Review” Vol. L. VII (1951), No. 1, pp. 2 sgg.
- 15) E. Garin: Discussione, in “Atti del III ecc.” pp. 136 sg.
- 16) A. Saponi: Medioevo e Rinascimento, spunti per una diversa periodizzazione, in “Archivio Storico Italiano” Anno CXV (1957), disp. 2, pp. 135 sgg. (Id.: L'età della Rinascita, secoli XIII-XVI [Milano, 1958] pp. 239 sgg. に再録) なお同様主旨の論文が Medioevo e Rinascimento; proposto di una nuova periodizzazione, in “Studi di Storia Economica di A. Saponi” Vol. III (Firenze, 1967) pp. 423 sgg. のほか “Nuove Questioni di Storia Medioevale”, pp. 597 にも載せられている。なお彼の発言をめぐるその後の論争については拙稿「II」145ページ、前掲『拙著』58ページ、F. Catalano: Note sul Rinascimento, in “Nuova Rivista Storica” Anno XLIII (1959), Fasc. 3 pp. 466~468など参照。
- 17) サポーリが “Annales” 誌の招へいを受けてパリに同様主旨を掲げて講演に出かけたほか、スイスその他の大学にも招かれていることは彼の論文集に再録された上掲論文の postilia を参照。なお中世トスカナ経済史にすぐれた業績を挙げた E. Fiumi: Fioritura e decadenza dell' economia fiorentina, in “Archivio Storico Italiano” Anno CXVII-1959. p. 502, n. 337 はサポーリの説を支持する。
- 18) IIの注11参照。
- 《IVの注》
- 19) R. S. Lopez: Hard times and Investment in Culture, in “The Renaissance: Six Essays.” Harper Torchbooks (1953) pp. 29~54. もとは in “A Symposium” (New York, 1953) に発表され、その後 K. H. Dannenfeldt ed.: “The Renaissance, Medieval or Modern? (Boston, 1959) にも収録。なお彼の主張の詳細は拙稿「II」142ページ以下参照。
- 20) Lopez and H. A. Miskimin: The economic depression of the Renaissance, in “Economic Historical Review” II ser. Vol. XIV (1962) No. 3, pp. 408 sgg.

- 21) 拙稿「II」155ページ以下、拙稿「IV」350ページ以下など参照。
 22) Lopez: *Hard times etc.*, p. 52.

《Vの注》

- 23) Y. Renouard: *Discussione in "Atti III ecc."* pp. 140-141.
 24) Renouard: *Les hommes d'affaires italiens du moyen age* (Paris, 1949) pp. 171 sgg.
 25) H. Kellenbenz: *Der italienische grosskaufmann und die Renaissance*, in "Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte" Bd. 45 (1958) Heft 2, SS. 145 ff.
 26) それらの諸説については前掲拙著『ルネサンス期イタリア社会』第I部を参照されたい。
 27) R. Davidsohn: *Der florentiner Welthandel des Mittelalters*, in "Weltwirtschaftliches Archiv" Bd. 30, SS. 79 ff.

《VIの注》

- 28) A. Doren: *Italienische Wirtschaftsgeschichte* Bd. 1 (Jena, 1934) SS. 305 f.
 29) R. Davidsohn: *Geschichte von Florenz*, Bd. II, 2 (1908) S. 402. 中世イタリア都市の繁栄を資本主義もしくは初期資本主義とした諸例については拙稿「V」および「VI」の冒頭の部分参照。
 30) Doren: a. a. O. SS. 502, 509. I. Strieder *Werden und Wachsen des europäischen Frühkapitalismus* (Propyläen Weltgeschichte) [1932], S. 26 も同様の見解を示している。

《VIIの注》

- 31) C. Violante: *Discussione in "Atti del III ecc."* pp. 134 sgg.
 32) G. Saitta: *Discussione in Atti del III ecc."* p. 133.
 33) ドーレンも1300年代初葉、イギリス産良質毛のフィレンツェへの輸入、それを原料としての織布・染色・仕上工業の発展による問屋制の強化、資本の集中に *arte della lana* すなわち毛織物工業における資本主義の確立を見ている。(Doren: a. a. O. SS. 501 f.) なおドーレンの *arte della lana* に関する意見は拙稿「VII」および Doren: *Die Florentiner Wollentuchindustrie vom XIV bis zum XVI Jahrhundert* (Stuttgart, 1901) 参照。ドーレンのものをはじめ、フィレンツェなどの14, 15, 16世紀の毛織物工業や絹織物工業に近代資本主義の萌芽を見る説への私の否定説は拙稿「VII」と「XI」とを参照されたい。
 34) W. Sombart: *Der Moderne Kapitalismus* Bd. I, 1 (1928) SS. 281 ff., S. 308.
 35) Sombart: a. a. O. S. 273.
 36) K. Marx: *Das Kapital* (Otto Meitzners Verlag) Bd. 1 (1922) S. 681, S. 682 Anm. 189.
 37) S. D. Scaskin: *Atti del X Congresso Internazionale di Scienze Storiche* (Firenze, 1957) p. 541.
 38) L. A. Kotel'nikova: *Mondo contadino e città in Italia dell' XI al XIV secolo* (Bologna, 1967) pp. XVI sg.

《VIIIの注》

- 39) 1955年ローマで開催された第十回国際歴史学会議の近代史部会は D. カンティモーリとオクスフォード大学の E. F. ジェイカブとの報告を予め *Relazione del X Congresso Internazionale di Scienze Storiche*, Vol. IV, *Storia Moderna* (Firenze, 1955) に刊行して参会者に渡し、それに基づいて討論を行ったが、それらの報告の表題は "La periodizzazione dell' età del Rinascimento nella storia d' Italia e in quella d'Europa" であった。ここに紹介した彼の意見は同報告 pp. 327~330.
 40) Cantimori: *Il problema rinascimentale proposta da A. Saporì*, in "Studi in onore di A. Saporì" Vol. II (Milano, 1957) pp. 937 sg. 946.
 41) これらの点につきとくに拙稿「III」86ページ参照。そこでも指摘したがイタリア近世史の碩学 F. シャボーが「回顧的な性格を共通にするゆえ、ルネサンス文化は中世文化と一脈通じるものを持ち、無限の進歩を信じ過去のモデルを認めない啓蒙文化との間にむしろ文化性格上の隔絶が認められる」としている (F. Chabod: *Il Rinascimento*, in "Questioni di Storia moderna" a cura di E. Rota (Milano, 1948) pp.

85 sg. Id.: Machiavelli and the Renaissance, tr. by D. Moore [London, 1958] pp. 191 sg.) ことや、また彼がマキャヴェッリとグイッチャルディーニとの間に古代への憧憬と現代の直視とに表象される時代心意の差を見ながら、前者においてルネサンスの終わることを指摘している (Chabod: *Il Rinascimento*, pp. 88 sg. Id.: Machiavelli ecc. pp. 196 sg.) ことなどは、大いに注目に値いする。またトレルチが「ルネサンスはただ生の肯定による反禁欲的志向の点で啓蒙主義を準備したそのことによってだけ近代の形成に間接的に参与するのである」(E. Troeltsch: *Renaissance und Reformation*, in “*Historische Zeitschrift*” Bd. 110 (1918), 内田芳明訳『ルネサンスと宗教改革』[岩波文庫]) としたることや、さらにルネサンスないし人文主義に保守的・反動的性格を見る諸説、たとえば人文主義をカトリックの権威主義的・保守的反動と見るトッファニン (G. Toffanin: *Che cosa fu l'umanesimo* [Firenze, 1919] やルネサンスと反動宗教改革ないし絶対主義との結びつきを認め、近代化の前提としてカウンター・ルネサンスの思想の存在を主張したヘイドゥン (H. Haydn: *The counter-Renaissance* [New York, 1950] などの所説も注意しなくてはならない。これらの点については前掲拙著『ルネサンス期イタリア社会』第1部とくに34ページ以下、および拙稿「Ⅷ」参照。

- 42) 16, 17世紀におけるイタリア社会の封建的反動はカンティモリーだけでなく、ヴィオランテも上掲の討論の中で *il nuovo feudalesimo* として認め、カンティモリーはそれを *la rinascita feudale*, カンデローロ (G. Candeloro: *Storia dell' Italia moderna*, Vol. I [Milano, 1961] p. 53) は *rifeudalizzazione*, ライヒャー (R. Leicher: *Historische Grundlagen der landwirtschaftlichen Besitz- und Betriebsverhältnisse in Italien*, in “*V. S. W. G.*” Bd. 47 [1960] Heft 2, SS. 147 ff. 159.) は *die neue Feudalisierung* として認めている。その封建的反動ないし再編成の実例分析は E. V. Bernadskaja: *L'imposizione di tributi ai contadini dell' Italia settentrionale nei secc. XV e XVI*, in “*Studi in Onore di A. Saporì*” [Milano, 1957] pp. 793 sgg. に見られる。ルネサンス盛期から末期にかけてイタリア社会をおおったこの封建的反動の波こそは、イタリア中世都市の繁栄が、ヨーロッパ諸国の王侯貴族らの封建的特権と結びついた商業高利貸資本によって支えられたものであり、したがってその繁栄は封建制と根本的には対立するものでなく、それを根底からくつがえすものでもなく、むしろそれに迎合する一面を持つものであったことの証拠である。この点について詳しくは拙稿「Ⅱ」「Ⅳ」「Ⅴ」「Ⅵ」「Ⅸ」「Ⅻ」などを参照されたい。
- 43) 拙稿「Ⅱ」「Ⅲ」「Ⅻ」および前掲拙著の末尾の部分参照。
- 44) 拙著の「むすび」の部分、拙稿「Ⅱ」「Ⅲ」など参照。
- 45) A. v. Martin: *Die Soziologie der Renaissance* (Stuttgart, 1932) Kap. I, 1~2, Kap. II (山本・野村共訳『ルネサンスの社会学的考察』創文社1959年)

《Ⅸの注》

- 46) Sombart: a. a. O., Bd. II 2, SS. 1114 f.
- 47) この商人の土地への復帰をカンデローロ (Candeloro: l. c. pp. 24-26) は *la classe mercantile-terriera* (地主的商人階級) の成立と呼び、ヴィオランテはミラーノに関し別のところで詳細にその例を挙げている。(Violante: *La società milanese nell' età precomunale* [Bari, 1953] pp. 96, 118 sg.) すなわちそれはすでに11世紀ころに発する現象なのであって、僭主政の結果ではない。
- 商人の地主化だけでなく、封建貴族層や富農層のさかんな都市入住ならびに市民化に伴う不在地主的市民的土地所有の普及がルネサンス期イタリア社会の土地制度の特徴をなし、それが近世や近代のイタリア社会の体質ともなり、ブルジョワジーが地主的である社会的特質のもとで、リソルジメントが不徹底なブルジョワの変革でおわるイタリア社会近代化の遅れた事態につながるのである。これらについては拙稿「Ⅱ」「Ⅲ」「Ⅳ」「Ⅵ」「Ⅸ」など、また拙著『イタリア民族革命』近藤出版社 1973年刊を参照されたい。
- 48) ポーポロ・グラッソないし財閥的商人の貴族化の具体的一例として、フィレンツェに君主支配を樹立したメーディチ家のコージモ大公の治下にサント・エステーファノ騎士団が創立されたとき、毛織物工業や絹織物工業の大織元を営んでいた富裕大町人たちが、進んで家業を棄てその騎士団に加入していった例が準

げられる (E. Bruzzi: Sulla Storia dell' arte della lana in Toscana, in "Archivio Storico Pratese" Anno XVI-1938, p. 22.) 拙稿「VII」「XV」参照。

《Xの注》

- 49) A. Fanfani: Storia economica (Milano, 1948) pp. 341 sgg. 345, 500 sg.
- 50) ベッカーはヴィオランテが上掲のように14世紀中ごろにおいてイタリア経済の繁栄に量的よりも質的変化を見るべきだとした意見を引合いに出しながら、文化や社会意識においてその画期以前の自由奔放な動向とそれ以後フィレンツェに確立されて来る new paideia (新しい公的規律への志向)の動向とを指摘し、後者を以て15世紀以降のルネサンスの文化動向の精神的基盤を語ろうとする。その際、彼が抛りどころとしているものはヘーゲルの有名なアナロジー、つまり家を建てるのに火や水などが必要だが出来上がった家からはそれらは排除されるというたとえであって、社会の建設にあたって人間の諸情熱が必要であるが、ひとたび出来上ればそれらの情熱は排除され、パイディア(しつけ)が確立されるというのである。そして彼はその新しいパイディアを以てルネサンス国家(すなわち領邦の専制国家)の固い支配体制の成立を語ろうとする。(M. B. Becker: Florence in Transition, Vol. II, Studies in the rise of the territorial state [Baltimore, 1968] pp. 3 sg. 14 sg. 34 sg. and passim.) しかしその新しいパイディア志向の背後にあるものは、当時の支配階層の人びとの秩序志向、すなわちベアティ=ポッシンテンテスになり上ったエリートたちの保守的な秩序志向であったとされるべきであろう。
- 51) 拙稿「II」「III」「IV」「VI」「VII」「IX」「XII」「XIII」「XV」など参照されたい。
- 52) 注*で示した Romano の論文参照。
- 53) フィレンツェのルネサンスにおいて青年時代のロレンツォ=イル=マニー=フィコはじめ、財閥の貴族にのし上がった大商人の子弟たちが、騎士風の装いのもとに荘麗な騎芸大会(ジオーストラ)を開催してたのしんだことが伝えられているが、それはルネサンス社会の騎士道へのノスタルジャを示すもので、かれらの意識の貴族化の反映であろう。
- 54) P. J. Jones: Florentine families and florentine diaries in the fourteenth century, in "Studies in italian medieval history" (London, 1956) p. 191. G. A. Brucker: Florentine politics and society, 1343-1378 (Princeton, 1962) p. 37.
- 55) L. Martines: The social world of the florentine humanists, 1300-1460 (London, 1963) pp. 32 sgg.
- 56) Lapo di Castiglionchio, Epistola, ed. Lorenzo Mehus, p. 148 cit. in "Martines: op. cit. p. 32 n. 51.
- 57) "mercatoribus nostris, qui sunt praecipuum nostrarum virium nostreque potentie fundamentum, et sine quibus hec nostra Respublica nichilless et"—Commissioni di Rinaldo degli Albizzi, ed. C. Guasti, 1, 66 'Dicembre 1404,' cit. in Martines: op. cit., p. 33 n. 56.
- 58) Martines: op. cit. pp. 267 sgg. 拙稿「II」にその内容を紹介した。
- 59) たとえば A. B. Hibbert: The origins of the medieval town patriciate, in "Past & Present" 1953, Feb. No. 3, p. 17. が主張するように「商業は決して封建社会の溶媒ではなく、その社会の自然の産物」と見られるべきこと、D. Waley: The italian city state (森田鉄郎訳『イタリア都市国家』平凡社1971)や N. Ottokar: I communi cittadini del medioevo (Firenze, 1939)が明らかにするイタリア中世都市国家のまさに中世的な性格(決して中世都市は封建制の溶剤ではない)などの認識が、ここで想起されるべきである。拙稿「XV」参照。

《拙稿略記表》

- 「I」=「イタリア=ルネサンスの政治」神戸商大『人文論集』第9巻1・2号 1973年
- 「II」=「イタリア中世都市経済とルネサンス」谷和雄編『西洋都市の発達』山川出版社 1965年
- 「III」=「社会経済的に見たイタリア=ルネサンスの時代づけ」史学雑誌第72編第1, 第2号 1963年
- 「IV」=「16, 17世紀のイタリア諸邦」岩波書店刊『世界史講座』第15巻第4版 1982年
- 「V」=「中世イタリア都市の食糧政策と農制との関係について」神戸大学文学会誌『研究』第3号

1959年

- 「VI」＝「mezzadria classica」同上第19号 1959年
- 「VII」＝「中世イタリア都市の繁栄の性格—フィレンツェの毛織物工業を中心に—」『社会経済史大系』
第III巻 弘文堂 1960年
- 「VIII」＝「ルネサンス研究史」歴史教育 第18巻第6号 1970年
- 「IX」＝「近代社会成立史上におけるイタリアの特殊性」社会経済史学 第24巻5・6号 1959年
- 「X」＝「封建的危機とそれへの対応におけるイタリアの特殊性」西洋史学 第11号 1951年
- 「XI」＝「イタリア史の一特殊性—封建制をめぐって—」日伊文化研究 第4号 1958年
- 「XII」＝「盛期ルネサンスの文化動向と繁栄の性格」同上 第5号 1961年
- 「XIII」＝「イタリアが近代化に遅れた理由」歴史教育 第10巻7号 1962年
- 「XIV」＝「ルネサンス期イタリアの絹織物工業の性格」井上幸治編『ヨーロッパ近代工業の性格』東洋経
済新報社 1961年
- 「XV」＝「イタリア中世都市コムーネ研究序説」神戸大学文学会誌『研究』第41号 1968年